

頭だけでなく
カラダまるごと
味わってください。

大正島 体感地図

アイラ
ドン

大阪市大正区

特別寄稿

柴崎友香(大正区出身)の書き下ろし

「大正区の夏と秋、冬と春。」

直木賞
黒川とも泉賀枝

商店街を離れると、すぐに静かになる。じつとり湿った顔や腕をなでていくなまぬるい風に、ふと海のにおいが混じっていることに気づく。

これは、海のにおい。

しばらくこの街を離れて帰ってきたときに、初めてわかつた。この街は、海のにおいがする。

泳げない海だし浜辺もないから普段はあんまりというか全然感じないけど、やっぱり海のすぐそばなんやな、と三十年も暮らしてからやつと気づいた。

川に囲まれて、海につながる場所。

小さい公園と商店街には行き飽きたけどあんまり遠出もできなかつた中学生のころだつたか、退屈するとときどき、川べりに出かけた。堤防の外側まで行つてみるのは、自分にとつてはささやかな冒険だつた。

堤防の外側は、距離としてはそんなに離れていないのに、別の世界みたいだつた。

(柴崎友香「大正区の夏と秋、冬と春。」P16~21)

大正島 体感地図

空から見ればよく分かる、

海と川に囲まれた大正アイランドの形。
この地団片手に、島の今を体感する旅へ
行ってらっしゃい。

*掲載の情報やマップは2014年3月7日現在のものです。



自転車でめぐる

- A 水辺の下町ぶらぶらコース ➡ P6
- B 巨大建造物ウォッチングコース ➡ P7
- バスでめぐる(★マーク) ➡ P10

ホーちゃん



ふくろう雑貨 ho-ho-

ふくろう好きオーナーが開いた真っ白な店内では、ふくろうモチーフの焼き菓子やふくろうのホーチャンがお出迎え!
● 11:00～19:00
水曜休
☞ 06-6710-9666

オーナー夫婦
松原新天さん

松原麻里子さん



雑貨屋 ミケちゃん

「お店番は、この4月で1歳になるメンフクロウ。この子も大正区のニューカマーマですね(笑)遊びに来てくれるご近所さんが多く、お客様が撮ってくれたホーちゃん写真展も人気でした」
(千島生まれのオーナー 奥谷 宮さん)

● 14:00～19:30
月・木・金曜のみ営業
☞ 06-7502-3914

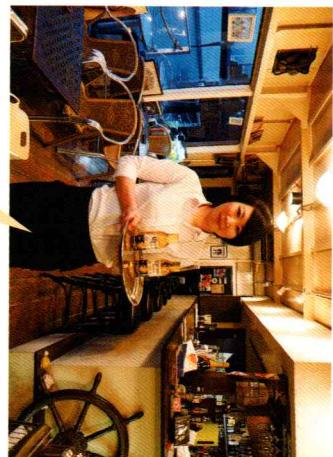


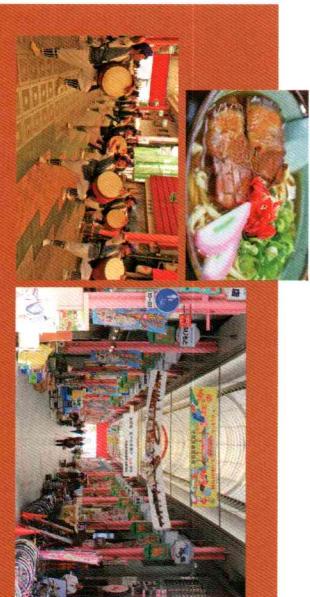
スタッフ
白神吉江さん

SUNSET 2117

内から見えた、このバーがある尻無川沿いの風景に惹かれたのがきっかけでした。昨年の秋に天王寺から泉尾尾に引っ越し、今は三泉商店街や泉尾商店街で、休日の買い物ハシゴを楽しんでいます。

SUNSET 2117
“水の都”を感じできる、
尻無川に浮かぶボートハウスバー。2Fは開放的な船上ライブスペース。
●祝休
● 18:00～24:00
☞ 06-6554-9670





JR・地下鉄 大正駅へは

- 大阪からJR大阪環状線で11分
- 天王寺からJR大阪環状線で8分
- ユニバーサルシティからJRで13分(西九条乗換後)
- 心齋橋から地下鉄長堀鶴見緑地線で6分

大正区の歴史的な絆から区民の約
1/4は沖縄に縁のある人たちと言わ
れ、中でも平尾周辺は沖縄文化が色
濃いエリア。毎年9月のエイサー祭は
平尾商店街が最も賑わうイベントだ。

最近は沖縄料理に大阪の下町テイ

ストを加えた“おきナニワん”フードが

区のあちこちで誕生し、食べ歩きを

楽しむ観光客が増えている。

第5代大正区
音楽振興大使
佐野仁美さん



**T-1 ライブ
グランプリとは**

2009年から始まった、若手ミュージシャンを応援すべく大正区で開かれてる音楽コンテスト。観客も審査員を務め、数々のコンテストを経験した佐野さんも「手作り感とアットホームさはT-1が一番」。予選とファイナルを勝ち抜けば、区を代表して1年間の音楽イベントに携わる「音楽振興大使」に任命される。



T-1 ライブグランプリ

2013年に現役高校生ながら堂々優勝。区内コンサートでは愛しのナンバーをカバーリ、中高年のハートも掴む。



一年間、大正区役所や商店街のイベントで音楽の楽しさを伝えています。沖縄でライブした思い出が強く、お気に入りの場所は、大阪なのに沖縄の雰囲気の平尾本通り商店街。サイクリングが趣味なので、渡船体験やハイエリア散策が楽しめるのです!

住之江区



その1

大正体感いろいろのはのいは

大正区濃縮コースを満喫せよ！

お世話になります。

自転車

安価に、
身軽に、
小回りがきく相棒。



大正区の名所を欲張りたいビギナーは、まずサイクリングを。「観光に来てみたはいいものの」を解消してくれる機動力が魅力。島の風を感じながら、下町やベイエリアを巡ろう。地面の凹凸を感じながら、下町やベイエリアを巡ろう。

体感地図
編集担当 江口が
ペダルをこぎました。



大正区 コミュニティ センター

2階でレンタサイクルが1日300円(保証金700円)で借りられる。
限定なので事前問い合わせを。
●利用時間 9:30~17:00
年末年始休 06-6553-5511

7 チャイ工房



古アパートの1階を改装した木の店内で味わえるミルクティーは、優しい甘さ。無農薬野菜ごろごろカレーも美味!
●12:00~20:00
月曜・火曜定休
06-6552-1924

5分



2分

看板ネコの
チャコに、
猫好きはメロメロ。

春は
ツツジが
見頃!



1分



区の中心にある
パワースポット。



2

昭和山(千島公園)

大正区役所の裏手に、標高33mの人工の山。眺望はもちろん、南国植物や四季折々の花々が、人々を飽きさせない。

2分

A 水辺の下町コース ぶらぶらス

区内のほぼ中央にある昭和山や公園の緑、歴史ある神社、どこか懐かしい下町商店街を訪ねて、ゆっくり流れる大正区での時間。

所要時間／約3時間

三泉商店街は東京タワーと同じ333m!

6 三泉商店街 泉尾商店街



三軒家から泉尾に伸びている2つの商店街は、区民の生活拠点らしい親しみやすい雰囲気。公設市場や老舗の名店、純喫茶や銭湯の併まいを、自転車を押しながらのんびり物色。

4分

地元の
スーパー!



5

上八坂神社

まずは43号線より少し北にある下八坂神社へ。寛永2年(1625)に建立された区内で一番古い神社だ。続いて向かう上八坂神社も正保4年(1647)建立の古い守り神。境内には三軒家を開墾した中村勘助の石碑。木津川掘削に尽力した大正区の偉人だ。



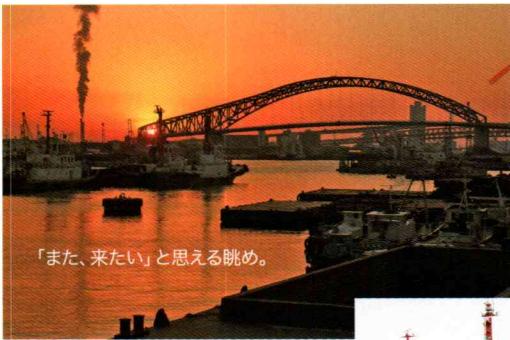
餌やり体験ができる時も!

4分

4

下八坂神社





「また、来たい」と思える眺め。



6 大正内港

旅の終わりは、多くの船が停泊する貿易拠点。夕焼けの時間はシャッターチャンス。大正区自慢のスポットだ。(P14)

5分



「初代ベストおきナニワ
んメニュー」に輝いた
【宮城ホルモン】は、気
軽さと甘辛味が人気。

上りきった先の
ものづくりビュー。



千本松大橋

多くの工場がひしめく船町一帯を一望すべく、千本松大橋の頂上へ。通称“めがね橋”は両端が螺旋状。

4



2分

1 大正区コミュニティセンター

自転車はそのまま乗り入れOK。



5分



まるでテーマパークの
水辺アトラクション!

千歳渡船場

2

通勤や通学で重宝されている
渡し船(P8)。中でも最長の航
路である千歳渡船場で、つか
の間のクルーズ体験。

5分



3 IKEA鶴浜

休日は遠方ナンバーの車が押
し寄せ、巨大な北欧家具
ショップ。小腹が空けば、店内
のピストロで腹ごしらえ可能。

●10:00~21:00

(土・日・祝日 9:00~)

年中無休(年始を除く)

050-5833-9000

ソフトクリームや
ホットドッグで休憩。



10分

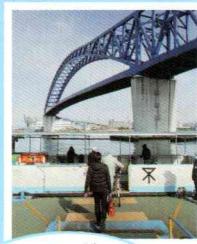




⑦ 甚兵衛渡船場

大正区泉尾 → 港区福崎 15分毎運航

発着場近くに高校があり、朝は通学ラッシュに。7カ所のうち、一番利用客が多い渡船場である。



父が渡し船の船長だったので、航行の合間に20分間に家の窓から見える父の姿を楽しみにしていました。



遊び場は渡船場
吉田忠章さん

小さい頃から、友人とUSJに遊びに行く時に利用しています。港区で天保山渡船場に乗り換えるのが鉄板です。



港区への橋代わり
尾上尚吾さん

⑥ 千歳渡船場 (P7)

大正区北恩加島 → 鶴町
20分毎運航

大正内港の工事の際、橋の代わりに設けられたのが始まり。最長371mの航路を利用するには区民が多め。



⑤ 船町渡船場

大正区船町 → 鶴町 15分毎運航

非常に航路が短いため、他所のS字航行とは違ってU字航行。工業地区の船町、住宅街の鶴町、2エリアのギャップがおもしろい。



④ 木津川渡船場

大正区船町 → 住之江区平林北
45分毎運航

三重ループを持つ国内最大規模のアーチ橋、新木津川大橋の下を渡る。7カ所のうち、唯一大阪市港湾局(他は建設局)が管理。工場に勤める人が多く利用。

06-6551-3143



① 落合上渡船場

大正区千島 → 西成区北津守
15分毎運航

実は木津川水門(P13)に最も近い、絶好の撮影スポット。乗降客が「癒される」と思わず足を止めてしまう、大きな金魚の水槽が目印。

② 落合下渡船場

大正区平尾 → 西成区津守
15分毎運航

10月～4月頃までは数百羽のユリカモメが飛来するエリア。公共の処理場や町工場が立ち並ぶので、降り立つとまた新鮮な風景が広がっている。



わたしの渡し 七景

他の区ではなじみのない「渡し船」。でも市内に8カ所ある渡船場のうち、7カ所が大正区となればそれも当然。隣の区や区内同士、地元住民は通勤も通勤も渡し船にお世話になつていて。驚くのはすべて無料、そして徒歩はもちろん自転車込みで乗れることが、渡船を体感すべしなのだ。

渡船管理事務所
06-6553-615295

③ 千本松渡船場

大正区南恩加島 → 西成区南津守
15分毎運航

巨大なループ橋の袂から、大正区と西成区の通勤・通学客が交わる。橋を歩けば15分の区間も、船のおかげで数分。



住之江区からライケアに通勤
中山貴加奈さん



大正ツアーガイド・アキラの

大正トリビアカフェ ~自転車編~

地元民が見れば「あるある」。知らない人が見れば「へえ～」。
ちょっと寄り道して、大正区の小ネタで一息つきましょう。

いなだ あきら
稻田 晓 (大正観光案内人)



Menu 1

青春の裏ワザ、「自転車高速」。



まちの変わり種を盛り込むツアーガイドが人気。区内での目撃率は高い。

Menu 2

ガイドに載らない、大正チチ名物巡礼。



Menu 3

夜のサイクリングSOSは、ここへ!



夏は店内ガレージでBBQ、休日はサイクリングイベントも開催。日時や内容は「アミーゴスバイク」でレッツ検索!

AMIGO'S

●15:00~24:00頃 不定期

♪06-6555-6233 ※来店前には電話連絡を。

Menu 4

町の歴史を知ってこそ、通です。



その2

バスがあるから、ここに来ました。



初代大正区音楽振興大使
「歌姫」羽地直子とゆく
「うたの大正」



大正の風土が生んだ天然歌姫
羽地直子（シンガーソングライター）

平尾生まれ、平尾在住。2009年の第1回T-1ライブグランプリで見事優勝し、初代音楽振興大使に。現在は区内など関西で活動中。



「いつも来ても、音楽と笑い声が聞こえる店です」

正起屋（居酒屋）

「ライブの打ち上げで、音楽仲間とよく来ます」と案内してくれたのは、定番の居酒屋メニューに加え、もしく天ぷらやゴーヤーチャンプルーといった沖縄料理も豊富な大衆居酒屋。看板娘の池原知佐さんは羽地さんの後輩で、知佐さんが奏でる三線に合わせ、沖縄民謡を口ずさむ羽地さんというシーンも。「盛り上がって店の熱気が高まると、三線をお客さんが回し弾きしちゃうんですよ」と、これが大正区の日常らしい。



ふんわり軽いもしくて天
ぷら400円。沖縄そば
とホルモンを合わせた、
おきナニワンホル
モン焼きそば680円。



「風邪だった時、ここスミ汁
(イカスミを使った沖縄料理)しか体が受け付けなくて(笑)」と
どっぷり常連の羽地さん。

●16:00~23:00 月曜休
☎06-6553-9819



駅から
目的地まで
その逆も、
夜遅くまで
運行中。



「大正区の
音楽の先輩です」



ALL is VANITI(ミュージックバー)

隠れ家的な地下バーには、音楽好きが目を見張る楽器がぎっしり。マスターの木下清治さんは、T-1ライブグランプリ繋がりの音楽仲間。ロックなBGMに浸りながら、音楽のルーツについて語り合う2人だった。

●20:00~翌3:00
無休 ☎06-6551-5027



「じっくり歌えるのが
心地いいんですよね」



**ピアノフォルテ
(カラオケスナック)**

扉はピアノとカラオケの先生
の顔を持つママ、田中由美子さ
んが仕切るスナック。「ママに会
いに通ってるんや」と話す常連
は、元ミュージシャンばかり。羽
地さんがしっとり歌い上げたナ
ンバーに、店内からは大きな拍
手がわきおこった。

●19:00~24:00 火曜休
☎06-6555-3687



大正区は夜も楽しい。美味しいお酒と料理、大将や女
将さんの人柄に惹かれ、陽気なお客さんが集まつてく
る。でも地元住民が通う店は、駅から少し離れたどこ
にあつたりする。夜バスを利用しない手はない！

夜バスのうまいを味わうべし！



自宅では味わえない音と映像
トロピカルダンディ (ダイニングバー)

普段は南国を連想させる1枚を流す、特大モニターとBGM。ドームライブ帰りに立ち寄り、リクエストナンバーで余韻に浸るお客様。

●19:00～翌1:00(金・土曜～翌3:00)
不定休 ☎06-6551-8228



陽気な顔が並ぶ酒場ライブ
田中屋酒店 (居酒屋)

昭和歌謡が似合う下町の酒場ながら、連日のライブはロックやジャズも網羅。羽地さんを始め、地元を愛する若手や古株が出演。

●16:00～22:00 不定休
☎06-6551-0198



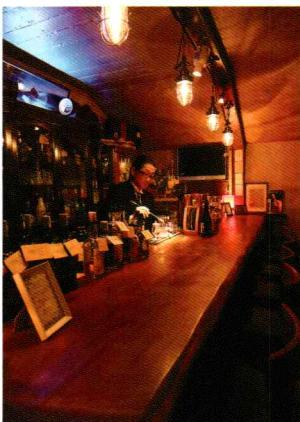
ご近所さん密着で生まれる音色
千成 (居酒屋)

地元住民が必ず名を挙げる気さくな居酒屋。2ヶ月に一度、店内で開くジャズライブや不定期のオールディーズライブが大好評。

●17:00～24:00 火曜休
☎06-6553-2251



BAR in
●19:00～翌1:00 不定休
☎06-6552-6952



一方、駅近なのにアメリカの
西海岸のような風景を持つ
のは、尻無川左岸沿い。



「終電でもう一軒」という時に知つておきたいJRガード下や尻無川左岸エリア。高架下といえば安くても美味しい、狭くても雰囲気の良い店が集まり、下町・大正にマッチしている。

だから **BAR in** のような、落ち着いたカウンターメインの本格バーは意外な驚きが。北新地や難波で腕を鳴らしたマスター、坂本雅央さんが地元の大正区でバーを開いたと聞きつけ、馴染みの芸人や遠方からの常連が立ち寄っている。大人の階段をのぼりたいバー初心者にも敷居は低く、がモットーだ。



ウイスキー500円～。リクエストがあればウイスキー講座も開く。

まだ帰れない大正 ～夜はこれから～

（写真：左：BAR in、右：大正トリビアカフェ）

大正ツアーガイド・アキラの 大正トリビアカフェ ～市バス編～

大正区民の合言葉は

終バス

大正通に並ぶ
バス停はみんな
歩道に張り出
してて、存在感
がすごい。

機嫌よく飲んでいて、そろそろ気になるのが終電の時間：ではなく、大正区民の場合終バス。そもそも北端に大正駅があるのみなので、区内における交通の中心は市バス。ダイヤの間隔が短くなる朝のラッシュ時、バスが連なって走る光景は圧巻だ。夜は大人の強味方に。なんば行なら鶴町四丁目から23時過ぎに発進、大正橋まで約20分。逆に大正橋は、日付を越えても区内へ市バスが出るありがたさ。遊び疲れた私にバスは優しい。

密かに注目したいのが工場が立ち並ぶ船町終着の70系統バス。近畿所（P14）の夜の姿を求める“工場萌え”カメラマン御用達の路線だ。

バス最終時刻表

休日夜の鶴町四丁目発 (71系統 なんば行)

23:09 鶴町四丁目	0:01 大正橋
23:19 小林	0:06 南泉尾
23:23 南泉尾	0:10 小林
23:30 大正橋	0:20 鶴町四丁目

休日夜の大正橋発 (71-90-91系統 鶴町四丁目行)

0:01 大正橋
0:06 南泉尾
0:10 小林
0:20 鶴町四丁目



※バス時刻表検索（大阪市交通局）
<http://kensaku.kotsu.city.osaka.lg.jp/jikokuhyo.html>



その3

やつぱり海から 見たいぞ、大正区！

無類のクレーン好き
泉 英明さん



案内人は
水辺の
エキスパート
コンビ

大正体感ドボクルーズ
with 御舟かもめ



御舟かもめ 船長
中野弘巳さん
定員 10名の小さな遊覧船を操る。
2009年から始めたドボクルーズは、その迫力がマニアに好評。



大正橋をいざくぐらん。
頭上の往来とは真逆に、
橋の下は暗くて静かな
空間。水の神殿に突入
する気分だ。



手始めに、人を運ぶ橋たちの裏側を。

A 大正橋から環状線、 大浪橋へ



機関車が走っていた頃にできた環状線の鉄橋は、かなり頑丈で重い物にも耐えられます。車が走るようになって架け替えられた橋と違って現役。年季の入った様子が観察できます。



中野船長の見どころ
ガイドも必聴。



大正区民の
生活には
欠かせない。
お世話になります。



B 民間造船所の営み

木津川沿いだけでなく、
船町や尻無川沿いでも
目立つのが造船所の作
業風景。水の中へ消え
るレールを目印に。



名だたる
造船所が
拠点に選んだ。



創業400年の南進造船所では、大阪市の最新消防艇「ゆうなぎ」のドック入り現場を目撃。日立造船や、かつては藤永田造船所が拠点を置いていたり、老舗民間造船所が多いです。



大正アイランドに大接近せよ！
小舟で巡る、大正島クルーズ。川を辿って島の輪郭をなぞりながら、橋やクレーンなどの巨大建造物、伝統のものづくり、水辺を活用した“今”に触れよう。水都大阪が凝縮されたシーンが見えるはずだ。



水都を守る緑色の番人。

C 木津川水門

海に開けた大正区ならではの防潮対策。木津川水門のアーチ式や、真横の三軒家水門の引き戸型は国内でもアレア。

大型船が通るための巨大アーチ。緊急時は北側に倒れ、大阪湾から押し寄せる高潮をせき止める「バイザゲート」に。大正区だけでなく、大阪のまちそのものを守ってくれています。



圧倒的スケールの働き者。

D 静脈物流のゲンバ



効率重視のコンテナでは扱いにくい砂や古紙、鉄くずを担当するのが、大正区のクレーンたちが活躍する現場。住之江区が物流の動脈なら、大正区は静脈。お互いが支え合い、大阪市が成り立っています。



木津川水門をくぐれば、そこは人間サイズを離れていく異世界。川に張り出すクレーンや、穀物を貯蔵するサイロがぞくぞく登場。

木津川渡船場
新木津川大橋
千本松大橋
中山製鋼所
落合上渡船場
落合下渡船場
木津川
昭和山
大正通
大正区役所
民間造船所の営み
阪神高速西大阪線
JR大阪環状線
鶴見緑地長堀
大正橋
大浪橋
甚兵衛渡船場
国道43号線
尻津川
大正橋から環状線、大浪橋へ

ドマークとして自慢したい。
なみはや大橋も、大阪のラン
橋、大パノラマが約束された
千本松大橋(P-7)は、車も通
行できる二重ループ。新木津
川大橋は大迫力の三重ル
ープ。美しい青がうねる千歳
橋、大パノラマが約束された
なみはや大橋も、大阪のラン

大正区は、大正4年にかけられた初代大正橋に由来。区が発足した昭和7年に住民から公募した結果、票が多く集まった大正橋区という名前を縮め、最終的には大正区に決定した。市街地と繋ぐ、当時の日本最大のアーチ橋は、住民にはインパクト大だったに違いない。

環状線より南は、大型船

大正トリビアカフェ ～橋編～

橋と大正区のディープな関係。

大きな橋がかかっているのは、大正区が船運の要所である証拠。



こんな規格外風景も見える。

G

お隣のドボクビュー



60tに耐えうる、ダイゾーの
紅白クレーン。「運が良ければ、新幹線の積み下ろしに
出くわすこと」と中野船長。

ここから南港を見わたすと、そこ
は色とりどりのコンテナが並ぶ動
脈物流拠点。大正区とはまた違った
味わいです。このあたりに、天
保山の遊覧船「サンタマリア」の停
泊地があります。



港が内まで入り込む感覚を味わう。

F

大正内港



船上からは千島
団地や昭和山が
見える。まちと近
い港。船も多けれ
ば、浮かぶ水鳥も
多い一帯。



タイヤがいくつも付いたタグ
ポートは、外国から大阪港に來
る船の最先端のおもてなし役。
駆り出されては押して引いて、毎
日大型船舶をきちんと着岸、離
岸させるデキるやつです。



IKEA鶴浜

なみはや大橋

IKEA鶴浜

お隣のドボクビュー

H 尻無川水門



コンテナを吊り下げる、緑色
のガントリークレーンは泉さ
んのお気に入り。

H

尻無川沿いの
生活

甚兵衛渡船場



阪神高速西大阪線

大正区役所

昭和山

大正通

千本松大橋

中山製鋼所

木津川渡船場



新木津川大橋



中山製鋼所率いる工場群



E 口ヶ地になった“工場萌え”の聖地。 中山製鋼所率いる工場群



松田優作が出演した『ブラック・レイン』
のロケ地になった、ドボクルーズの目
玉。優れた産業研究に贈られる大河内
賞を受賞しました。通称“鳥かご”は、
膨張式タンクの外枠の名残です。



軍艦島の如き中山製鋼所。
小舟で向かえば、要塞に乗
り込むような高揚感。右は
木津川から、上は北側から。



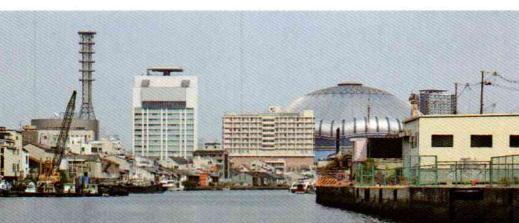
H 尻無川水門



巨大な尻無川水門をつくる大規模工事の事故で殉職された方のため、水門手前には八角柱の慰霊碑が建てられています。この水門をくぐれば、岸辺に生感が戻ります。



日常生活へ戻る青い門へ。



川がもっと身近になった
水路の旅でした。



クルーズ中は、クレーン
のおっちゃんが手を降つ
てくれるオプション付き。



百聞は一見にしかず。
迷わず乗るべし。

●協力してもらった御舟かもめさんは、普段もドボククルーズ運航中。その他、都心部の中之島や道頓堀も回るコースの詳細は[こちら](http://www.ofune-camome.net)。

<http://www.ofune-camome.net>



I 尻無川沿いの生活

実際に船で進めばわかる、
いい意味でごちゃまぜな風
景が広がる。懐かしさと新し
さ、水辺の生活のバラエティ
感を再確認しよう。



堤防が敷地より内陸側に引っ込んでいるため、水陸の距離が近い。
水辺と堤防の狭間に瓦屋の倉庫
や石材置場、作業船にヨット、水上
カフェが混在する、生活感あふ
れる独特の光景なんです。

台風や津波などの災害時、
閉鎖されて堤防の一部に
なる防潮鉄扉。

↑ 大正ツアーガイド・アキラの
ガイド

大正トリビアカフェ ～水辺の生きもの編～

海と川の住人も
増えているらしい。

大正区は、淡水と海水が混じった汽水に
生息する魚種が多い。たとえばボラの稚魚
は川に入り、成長後は河口に戻る。水面で
跳ねている姿は、けっこうおなじみ。
さて、川の水質が改善されたことにお気
づきだろうか。大阪市が平成23年度に行
なった調査では、なんと尻無川で絶滅危惧
種とされたウキゴリが見つかった。千島下
水処理場(P6)も取り組んでおり、近
年の高度な下水処理能力や環境改善の意
気込みの効果。魚が多くなると、カモ、カモ
やユリカモメ、カモが多くなる。

皆さん、絶対に川や
海を汚さないでね。

15

← この後は、柴崎友香さんの書き下ろし作品をお楽しみください。

大正区の

歌とはちがう「ふるさと」

どつて歩いていると、ふと、焼き肉屋に並んでいる人と
目が合った。

「あー！」

環状線で帰つてきてもバスで帰つてきても、商店街伝
いにひたすら歩くのが好きだつた。

夏と秋、 冬と春。

柴崎 友香

商店街というものは、駅前にあるのが定番のイメージ
だが、この街の商店街は区の中心を貫く大通りから逸れ
てちょっと歩いた先からひつそりと始まる。屋根がかか
つた幅の狭い道が、しばらく行くと枝分かれし、さらに
進むとまた別の商店街につながる。

洞窟を探検するのにも似ているし、住んでる人だけが
知つてゐる秘密の通路みたいな感じもするし、やはりあ
のアーケードというものはその場所を独特の風景に変え
てしまう力があると思う。

家が建ち並ぶ静かな通りの途中に、ぽつかりと、静か
な商店街の入り口がある。わたしが子供のころ（もう
三十年も前！）に比べたらお店は少なくなつたが、い
ろんな種類の商店が人を迎える親しきのようなものは、
やつぱりまだ残つてゐる気がする。
それに今日は、お祭りだつた。

夏のお祭り。

シャツターが閉じてゐる店の前にも屋台が出て、びつ

くりするくらい人がいる。着慣れない浴衣で走つてゐる
子供、かき氷を食べる十代の女の子たち、久しぶりに並
んで歩く老夫婦。派手な色のビニールのボールやらソーサ
スが焦げるいのいを立ち上らせてゐる焼きそばやら
キヤラクターの形の飴やらに目移りしながら商店街をた

お互に、驚く。中学の同級生だつた。少なくとも五年は会つていなかつた。もしかしたら、十年かも。
「元気？」

わたしはうなずき、同級生が手をひいている三、四歳
くらいの男の子に目を向けた。
「今、帰つてきてんの？」

「子供。あつちの、もう一人と」

同級生は、はす向かいの綿菓子の屋台に並んでいる、
女の子を指差した。もう小学校の三年生か四年生といふ
大きさ。

「二人ともめつちや似てる……」

「よう言われる」

同級生は笑つた。一度別の街に移つたが、二人目が生
まれたのを機に実家の近くに戻つてきたということと、
数人の同級生の近況を伝えてくれてから、こんなことも
言つた。

「あ、そうや、この子と保育園でいつしょの子のお父さ
んがしばちゃんの知り合いやつて言うてたで」

「え、誰やろ」

「えーととなあ……」

その名前に該当する人は二人いたが、一人は京都、

一人は生駒に住んでいたはずなのでどちらにしても意外だつた。

商店街を出るまでに、あと一人、同じ学年だった人を見かけた。大人になつても、祭りに行くと心がわきたつものだ。

子供のころも、今も、七月に入ると、神社のお祭りと商店街の夜店が毎週のようにある。今週はここ、来週はあつち、と友だちと待ち合わせて行くのが楽しかった。さつき会つた同級生とも、何度もいつしょに行つた。そややうや、夜店の帰りに公園で花火をやつてたら近所のおつちゃんに怒られたんやつた。

祭りがある夜に、ぶいいーん、とあちこちから聞こえていたのは、ストローの先に風船と羽根がくつついた笛で、今でもあれつて売られているのかあんまり見たことがない気がするが、夜店の光景を思い浮かべるとなぜか必ずあの音も同時に再生される。

どうしようもない蒸し暑さと、屋台の電球の熱さと、紺色の夜の空が、わたしの「夏」にはしつかりしみ込んでいる。

商店街を離れると、すぐに静かになる。じつとり湿つた顔や腕をなでていくなまぬるい風に、ふと海のにおいが混じっていることに気づく。

これは、海のにおい。

しばらくこの街を離れて帰つてきたときに、初めてわかつた。この街は、海のにおいがする。

泳げない海だし浜辺もないから普段はあんまりとい

うか全然感じないけど、やっぱり海のすぐそばなんやな、と三十年も暮らしてからやつと気づいた。

川に開まれて、海につながる場所。

小さい公園と商店街には行き飽きたけどあんまり遠出もできなかつた中学生のころだつたか、退屈するとときどき、川べりに出かけた。堤防の外側まで行つてみるのは、自分にとつてはささやかな冒険だつた。

堤防の外側は、距離としてはそんなに離れていないのに、別の世界みたいだつた。

堤防の外を歩いている記憶も、なぜか夏の蒸し暑いときのことばかりだ。

大型トラックが行き交つて、砂埃を巻き上げる。腕も脚も口の中も、ざらざらした。

コンクリートと錆びた鉄に容赦ない真夏の熱が跳ね返つて、皮膚がひりひりした。人の気配の少ない倉庫の周りには、これから使うのか使い終わつてどこかに運ばれていくのかわからぬ鉄の輪や歯車や管が積み上げられていて、大きな工場の中では鉄の塊がクレーンに吊り上げられたり、溶接の火花が散つたりしていた。

家や学校の近くにも小さな工場はあつて、おつちゃんたちが作業しているのをずっと眺めていることがあつたが、鉄の塊や木材が形を変えていくのが不思議だつたし、おもしろかつた。あの鉄のなにかは、建物とかもつと大きな機械の中身になるんかな、電車とか船の中身になるのかもしけへん（それか、中身やつたか）、いろいろ想像しながら、歩いた。ただそれだけで、特別いいこと

柴崎 友香 しばさき・ともか

1973年大阪市大正区出身。2000年に『きょうのできごと』でデビュー(2004年に映画化)。2007年『その街の今は』で第57回芸術選奨文部科学大臣新人賞、第23回織田作之助賞、第24回咲くやこの花賞を受賞。2010年『寝ても覚めても』で第32回野間文藝新人賞受賞。主な著作に『また会う日まで』『ビリジアン』『主題歌』『虹色と幸運』『わたしがいなかった街で』など。



に出会ったわけでもなかつたし、テレビドラマや漫画に

よく出てくる一階建ての家が並ぶ住宅地みたいなのは全然違つたし、「ふるさと」つて歌に出てくる風景ともなにひとつ共通点がなかつた。だけど、自分は普段の生活の中では見えないものをちょっとだけ知つてゐるや、という気持ちになつた。

遠くに行つてみようと歩き出して、どの道をたどつても、川に行き着いた。どの道も川のところで行き止まり。川沿いにひたすら歩くと、きっと一周してもとの場所に戻つてくるんやろな、と思つた。

そして、なんでもない顔をして堤防の内側に戻つてきて、商店街をいつものようにぶらぶら歩いて、家に帰つた。

山も育つ

ところで、わたしの街には、山がある。標高三十三メートル。昭和四十五年にできたから昭和山。

地下鉄の工事で掘つた土を運んできて盛つた山。リサイクルの先駆け。大阪弁で言うところの「始末」かも。このあいだ、初めて大正区に来た人を案内して、昭和山にのぼつた。山頂まで行くなんて、十年以上ぶりだった。秋の終わりで、人工の山だからきれいに弧を描いた遊歩道には、落ち葉が積もつていた。

自分が思つていた「昭和山」より、実際の「昭和山」は山らしかつたし森らしかつた。鳥が高い声で鳴いて、

木漏れ日が風で揺れていた。

山頂までのぼつたら、大正の街と大阪湾の風景が一望できるはず、と思つて、のぼつている途中も同行の人たちに「見えますから」と自慢げに言つていたのに、いざ山頂にたどり着いてみると、木の梢が視界をさえぎつていて、期待していた大正内港方向のクレーンや橋はその隙間からのぞくという感じだつた。

アルバムにある写真、子供のころのわたしがこの場所に立つてある写真では、もつとまわりは広々としていた。すこーんと遠くまで見渡せていた記憶がある。

そうか、木がこんなにも育つたのか。

四十年ちょっと前に土の山に植えたたよりない若木たちが、こんなに背が伸びて、枝を広げたのか。長い長い年月の分、木は育つた。

見晴らしはよくなくなつたかもしれないが、「山」や「森」に近づいた。

五十年も経てば、それは自然と呼んでもいいんじやないかと思う。

山頂の一段高くなつた場所に上ると、ようやく、木々の向こうに港が見えた。工場の屋根と、大きな橋。なみはや大橋と港大橋のシルエットが重なり合つていた。

まだ午後の早い時間で、曇りと晴れの中間ぐらゐの白い空と、ほんやりと霞んだ空気が、海の果てで混じり合つ。

日没がきれいやろな、と思つた。この季節なら太陽はどのあたりに沈むのか、ちょうどあの巨大な橋の向こう

かもしれない。

大阪は、西の海に向かって開けた街だから、昔から夕陽が美しい場所として知られてきた。大正区は、その西の縁にある。

高校生のころ、難波や心斎橋に友だちと自転車で遊びに行つた。洋服屋を買わずにのぞくだけ、たこ焼きを食べるくらいで夕方帰ろうとしたら、友だちが少しあとにしようと言つた。なんで、と聞いたら、

「もうちょっとしたら、太陽に向かって走れるやろ」と返つてきた。

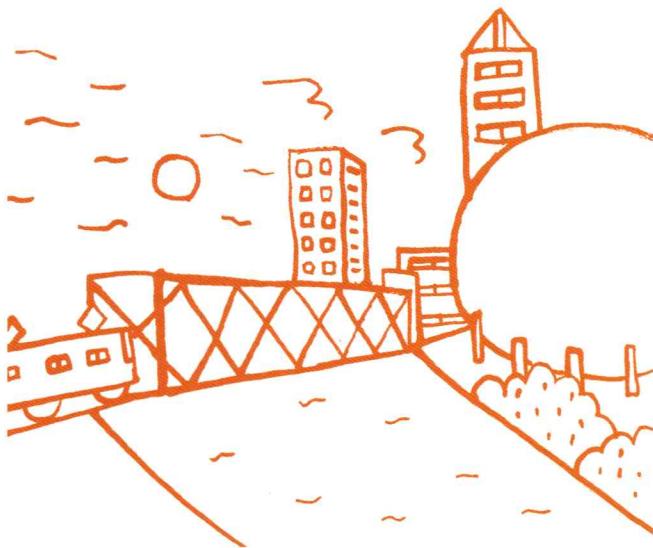
日が沈む時間に併せて、千日前通を真西に向かって走

川や港沿いのクレーンと橋が、黄色く光る空に影になつて浮かび上がつた。

高校に入つてから、あんな大きな橋を間近にみることも、渡し船に乗ることも、ほかの街の人にとってはめずらしいことなのだと知つた。

ときどき興味を示してくれる（たぶんすこしめずらしい趣味の）子もいて、こんど連れてつたるわ、と何度か案内した。

自転車で渡し船の乗り場に行く。船が出る時間が近づくと、同じような自転車の人がぼつりぼつりと集まってきて、ちょっととリアなこの小さな船が、ちゃんと生活の一部になつてるんやとわかる。広くはない川で、エンジンの音を響かせた船がS字にぎゅうんとカーブして船着き場に横づけするところは、何度もかつこよかつた。強い風が吹きつける渡し船の上から眺めると、橋やクレーンはゆつくりと動いていくように見えた。冬の低い日差しが海面に反射して、まぶしい。海とエンジンの油のにおいが風に混じつていた。



る。大正橋の坂をペダルを踏み込んで上ると、丸いガスタンクの左側、環状線の緑色の鉄橋の向こうに、まるい太陽がオレンジ色に光り続けている。空はオレンジからピンク、紫色へとグラデーションで、ときどき天変地異でも起きそうなものすごい色を見た。

子供のころ住んでいたのは団地の九階で、西向きの廊下から太陽が沈んで消えるまでひたすら見ていることがよくあつた。

橋や工場は、冬に見るのがいい気がする。

乾いた冷たい空気の中で、巨大なコンクリートと鉄骨はびくともせずに同じ場所でじっと立っていた。工場の外壁を這う鉄パイプや、複雑な形が穏やかな日射しに浮かび上がり、機械の音が高い空に響く。

船が通るために高いところに架けられた橋を見上げていると、普段生活している中で使っている単位と全然違うことに圧倒される。大きさの感覚が変わってしまう。そこには必ず働いている人の姿があつて、あの風景が自分の中にあると思うと、なんとなく心強かつた。

出会う、まざりあう

夜店の次の日、バスに乗り込むと、いちばんうしろの座席に見覚えのある人が座っていた。

商店街で会った中学校の同級生が言っていた、子供が同じ保育園のお父さん。

「わー、ほんまに住んでるんや」

久しぶりに会った友人は、なんとなく「お父さん」つぽい顔になっていた。

「もつと歓迎してえな」

「してるやん。どのへんに住んでんの、なんで大正にしたん」

と、わたしは次々に質問した。

「うちのかあさんが、むかーしこのへんに住んどつたっていうのもあつて」

「へえー、どこらへん?」

「平尾商店街の近くかな。よう覚えてないみたい」

沖縄の出身なのかなと思ったが、友人のお母さんの田舎は奄美大島のことだった。

「みんな、船で来るんやな。海の向こうから」

わたしの父もそうだった。瀬戸内海の島から、フェリーに乗つてやつてきた。

「おれは淀川を下つてきたけどな」

「そうか。わたしそり、もうこのへんのことよう知つてそうやな」

「まだまだです」

バスは、いつもどおりにそそご混み合つていた。前のほうに座る顔見知りらしいおばあちゃんたちのしゃべる声が、賑やかに響いている。

「あ、わたしもおんなじの保育園行つとつてん。一期生やねんで」

「一期生? すごいな、大先輩やん」

保育園も団地も、まだ、いろんなものができたてだつた。昭和山も。

時間が経つて、できたての街の新鮮さや賑やかさは薄れただけれど、そのぶん、ここで暮らしてきた人たちの記憶と時間が積み重なつて、この場所らしさが、ほかの街にはない風景が濃くなつてきたのだと、感じるようになつた。

「保育園の桜の木に登って、ようさん毛虫とったなあ」

「毛虫？」

「みんなで、競争して。それを集めて水槽みたいなんに入れて、教室で羽化して飛んでいくまで観察しようか、つて先生が」

「桜についてる毛虫つて……」

「うん、蛾になるのになー、と思つてた」

「冷静やな」

「みんなが蝶になるの楽しみにしてたら悪いなと思つて。でも、今から考えたらみんなも知つてたような気がする」

プラスチックの水槽の中で、幼虫たちはけんめいに吐いた白い糸で隅にくつづいてさなぎになり、順調に茶色い羽が生えた。

プールのある屋上から羽ばたいていった。勢いよく飛んでいくて、遠い空に見えなくなつた。

「蛾でも蝶でもたいして変わらんからな。羽根があつて、飛んでいくんやろ」

「そうやな」

「ええ話やな」

「これはほんとうは、メールでのやりとり。友人には、まだ実際には会えていない。だけど、わたしが大正区を離れているあいだにも、友人は大正区に住んでいる。ときどきわたしは友人がインターネット上のところどころに書き込む言葉を見て、街の天気やイベントなどを知つたりする。わたしは花見に行つたことがなかつたけど、昭和山は桜もきれいらしい。」

だから、そのうちにほんとうにいつしょにバスにも乗れると思う。

バスは、停留所に一つ一つ停まりながら、ゆっくり進む。ふと見ると、バスの行き先案内の表示板が最新型になっている。いつのまに。

こここのバスはいつも最先端だ。バスがずっと身近だつたから、わたしはほかのどの街に行つてもバスに乗りたくなつて、実際乗つてしまう。

窓から外に目をやると、新しいマンションができるていた。そのままに向こうには、タワーマンションがまた増えている。

なくなつたお店もあるし、ずっとおなじおつちゃんとおばちゃんが店に立つてあるところもあるし、新しいお店もあつた。

変わつていく風景の中に、記憶の中とまつたく同じ家や工場がふとあらわれる。変わらない街並みの中に、「なんかおもろいもん」を見つけることがある。

川の水と海がまざりあうところ。

海を渡つてきた人と、街で生きる人が出会うところ。夏も秋も冬も春も、わたしはそこで暮らしてきた。



アイランド

柴崎友香を通して大正島を体感する3冊

柴崎友香の作品に登場する「大正区」は、あなたの知っている大正区と全く同じではないけれど、どこかで必ずシンクロする。読んでから大正島を体感するもよし、体感してから読むもよし。大正好き必読の3冊。



「行き止まりの街」で手足をバタつかせる。

ビリジアン

アスファルトや鉄に潮の匂い。工場の騒音や砂埃に包まれた街に住む作者自身のような主人公(山田解)の、小・中・高時代の「ある日」を綴った短編集。橋を渡って別の街に向かう自転車やホルモンを売りにやってくる軽トラなど、大正らしい「たまらん」が満載だ。学校の先生と一緒に爆竹を鳴らして遊ぶクラスメート、怒る工場のおっちゃん、突如現れるロックスターまで脇のキャラも濃い。舞台の多くは泉尾あたりから半径1km程度なので、区民や大正好きな人なら「あの辺やな」とニヤリ。そして、「ゴルバチョフ登場」「美空ひばりの死」「桂枝雀のドグラ・マグラ」などの文字を見て、主人公と一緒に年を取ってきたんだなと気がついた。

●毎日新聞社／本体 1,400円 +税



炎熱の尻無川左岸から大海原へトリップ！

パーティー

連作小説集『ショートカット』に収録。真夏の工場地帯を疲れ切った足どりで進む主人公(りょうちゃん)と友達の和佳ちゃんは、調子のいいカメラマン・なかちゃんと連れられてマリーナまでの道を延々歩かされる。ところが船に乗りこむや展開がいきなりトップギアに入り、クルーザーは凄いスピードで大阪湾へ。灼熱地獄から一転、楽園のような真昼の船旅を満喫したと思ったら、場面は夜の大阪市バス車内へ…。ふだんは意識しないけど、人は徒步を含め、移動する際の「乗り物とスピード」によって会話の中身がかなり変わんですね。クルーズ船のオーナーなどオッサンたちの大正弁がまことにリアル。

●河出文庫／本体 490円 +税



下を見るのは怖いけど見てしまった結果…。

ここで、ここで

傑作『わながいなかった街で』の単行本に収録の短編小説。「なみはや大橋」のてっぺんで機嫌よく写真を撮っていた「わたし」は突然、膝の力が抜けて動けなくなってしまった…！ 後日、そのことをイベントで知り合った人に話すと慰められるどころか、「ユニークなところにお住まいなんですねえ」。自分の街の「ふつう」が他所の人にとって「ユニーク」に映るのはよくある話だけど、巨大建造物や渡し船が日常の大正区民は、どこの住人よりもこう言われる頻度が高いのかもしれない。ちなみに本編『わながいなかった街で』には大正区が登場する場面はないが、主人公の平尾砂羽は大正区出身の女性として描かれている。

●新潮社／本体 1,400円 +税

大正区があなたの街に出張します！

「川と海、音楽のまち大正」は、琉球舞踊や三線、エイサー踊りなど沖縄伝統芸能を披露できる人材が豊富で、T-1 ライブグランプリのミュージシャンに「おきナニワんフード」の屋台も活躍の場を求めスタンバイしています。もしかしたらあなたが大正区の元気者を引き連れて、区長・筋原自ら大正区の魅力をお届けに馳せ参ります！



大正区長
筋原章博